



①当日の制作で使用された下絵。②最初に実物大に拡大された下絵をテーブル等で敷いていく。③学生、町会の人たちと、いっしょに作業していく。④完成した花絵。⑤終了後は、全員そろって記念撮影。



流山グリーンフェスティバル恒例の花絵 今年のテーマは「ギフト」

4月29日日曜日、流山おおたかの森駅南口都市広場で毎年恒例の花絵制作が行われた。流山グリーンフェスティバルのイベントの一つとして行われているもので、江戸川大学の学生と西初石6丁目

町会の人たちと共同作業で制作が行われた。1時間ほどで完成された花絵には、大きなハートの絵が浮かび上がった。花絵は5月4日まで公開された。(撮影・取材・文：工藤謙真)

強い陽射しの中で花絵制作は行われた。昨年の花絵は流山市制50周年を祝うデザインだった。今年のテーマは「ギフト」。次の50年後も素敵な街であるように、緑ある豊かな環境を未来につなげていく気持ちをハートでの形にして贈るという意味が込められている。流山市マーケティング課の川尻和佳さんが説明してくれた。

毎年、メディアコミュニケーション学部情報化学科の廣田有里教授のゼミ生は花絵の下絵を作成し、当日の制作は社会学部現代社会学科の学生とともに参加している。1月に流山グリーンフェスティバル実行委員会が開かれ、2月・3月での同委員会での協議を重ね、最終的に今回のデザインが決まった。

作業は朝9時にスタートした。実物大に描かれた升目に合わせて、赤ならサルビア、青ならランタナ、緑ならキュウリといったぐあいに下絵の指示にしたがって置いていく。地域の人たちや学生同士が声を掛け合うという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。

強い陽射しの中で花絵制作は行われた。昨年の花絵は流山市制50周年を祝うデザインだった。今年のテーマは「ギフト」。次の50年後も素敵な街であるように、緑ある豊かな環境を未来につなげていく気持ちをハートでの形にして贈るという意味が込められている。流山市マーケティング課の川尻和佳さんが説明してくれた。

毎年、メディアコミュニケーション学部情報化学科の廣田有里教授のゼミ生は花絵の下絵を作成し、当日の制作は社会学部現代社会学科の学生とともに参加している。1月に流山グリーンフェスティバル実行委員会が開かれ、2月・3月での同委員会での協議を重ね、最終的に今回のデザインが決まった。

作業は朝9時にスタートした。実物大に描かれた升目に合わせて、赤ならサルビア、青ならランタナ、緑ならキュウリといったぐあいに下絵の指示にしたがって置いていく。地域の人たちや学生同士が声を掛け合うという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。

現代社会学科の土屋薫教授のゼミでは、ボランティアとしてこの花絵制作に参加し、地域活動、地域とのつながりや協力の重要性を学んでいるという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。

長年参加している町会の人からは、「昨年と比べて段差などを使った演出がないから、高さがそろっていい」と、今年度のグリーンフェスティバル実行委員長の、花絵を毎年企画している廣田教授。

作業は朝9時にスタートした。実物大に描かれた升目に合わせて、赤ならサルビア、青ならランタナ、緑ならキュウリといったぐあいに下絵の指示にしたがって置いていく。地域の人たちや学生同士が声を掛け合うという。町会の人たちや学生同士が声を掛け合うという。

完成後は、お年寄りや小さな子ども連れの親子が足を止め、携帯電話で写真を撮ったりしていた。